

## 推薦の言葉

2011年、イギリスの医学誌『The Lancet』が「Japan : Universal Health Care at 50 Years(日本：国民皆保険達成から50年)」と題した特集を組み、日本の保険医療の素晴らしさと課題を浮かび上がらせた。世界を代表するジャーナルに評価を受けたことは日本の医療に身を捧げてきた立場として率直に喜ばしいが、一方で、未だ達成されないものがあることも認めざるをえない。それは何か？本書には、読む者にとってはその1つが巧みに示されていると思う。

現在の医師臨床研修制度は全国一律にどの病院で研修したとしても一定レベル以上の医師が育つよう標準化されることを狙っているが、そのなかでもオリジナリティを發揮することが個々の病院に求められ、医学生や研修医も求めている。いまや病院は患者さんからだけではなく、医学生、研修医からも選ばれる時代となった。そして、人的資源こそ、そのオリジナルを生む源泉である。無論、わが順天堂大学医学部附属練馬病院スタッフ個々の充実度は自負するところであるが、当院臨床研修のさらなる特徴、充実を求めた先が、ブランチ先生であり、その優れたケースカンファレンスであった。

ブランチ先生によるカンファレンス開始以来、その評判は院内研修医に留まらず、医学生や近隣の研修医も耳することとなり参加の輪が広がっている。その人気の秘密は一体何か？本書を手にとっていただければ、その理由を臨場感をもって感じてもらえる一冊に仕上がっている。それは、医療面接を重視し、多々ある病歴から疾患を絞り込む情報を見抜く目であり、鑑別へと至る身体所見の意味を察知する目であり、本書を読破した暁には、目の当たりにした必須の思考プロセスが、自らの血肉となり財産となるに違いない。

また、日本の医師にとって英語は、航海士にとっての海図や羅針盤であり、必須のツールである。本書に記された英語によるケースプレゼンテーションの基本的な型を、研修医のうちに修得することができれば、これから先の医師人生は海を越えてさらなる広がりをもつであろう。

当院で行われるブランチ先生のカンファレンスをコーディネートし、ブランチ先生とともに本書を作り上げてくれた井上健司先生は、順天堂大学医学部を卒業後、日野原重明先生率いる聖路加国際病院で研鑽を積んだ俊英である。本書でもカンファレンスでも、適宜、重要な解説を加えてくれることで、読者や参加者にとってより正確に理解が進むこととなった。また、イギリスと日本の医療の差異を感じさせてくれる箇所もあり大変興味深い。

最後に、彼の国イギリスから遙か極東の日本までやってきてくださったジョエル・ブランチ先生にあらためて感謝したい。彼がカンファレンスや本書を通して、日本の若き医師たちに伝承した臨床推論力は、彼らの内に宿りこの国の医療を支える礎となるであろう。

冒頭、『The Lancet』の指摘の1つは、日本におけるプライマリ・ケアや総合医の一層の充実を説くものであった。本書が必ずや読者に、医療面接を重視し臨床推論を進めるとい時代が求めるスキルをもたらすことをお約束する。

2012年3月

順天堂大学医学部附属練馬病院  
名誉院長 **宮野 武**